看護大通信 15

新潟県立看護大学
助教授　藤田　尚

介護と考古学

介護と考古学って何が関係するの、と思われる読者も多いと思います。実は、大有りなんですよ。考古学は、われわれの祖先のさまざまな生活や文化を復元する学問です。考古学から、介護の起源を探ることだってできるのです。今回は、はるか昔のわれわれの祖先が、既に介護の認識を持っていたことを紹介します。

写真は、イラク・シャニダール遺跡のネアンデルタール人の埋葬状況の復元です。約六万年前の人々ですが、第四号人骨の遺骨の周りからは、大量の花粉が見つかっており、死者に花を手向けた証拠だとされています。なんと温かい心でしょうか。われわれの祖先は、少なくとも六万年前には、死者を悼み弔う心情を持っていたのです。また、同じ遺跡から発掘された、第一号人骨は、人類学者の鑑定から、左目が恐らくつぶれており、右腕の肩甲骨・鎖骨・上腕骨の発育が不十分であるだけでなく、ひじから下がなかったとされています。科学的な医学や病院もない時代、この第一号人骨は、生きていくためにかなりの不自由を余儀なくされたことでしょう。しかし、死亡年齢は、四十歳くらいと推定されており、当時の平均寿命を大きく越えていたことも分かっています。家族でしょうか、それとも集落の仲間でしょうか。恐らくはそのどちらからも、この第一号人骨は、支えられながら、援助を受けながら命を全うしたと考えられるのです。正に、介護の起源を象徴する、考古学上の発見だとは思いませんか。

「提供：群馬県立自然史博物館」

今回紹介したのは、六万年前のわれわれの祖先の物語です。介護の精神を、人類がいつ、どこで獲得したのか。それを解き明かしていくのは、考古学や人類学でしかなし得ないことです。これからの成果に期待したいですね。時代はもう少し下がりますが、日本の縄文時代の人骨からも、介護の起源を考える上で、とても貴重な発見がされています。もし機会があれば、次回はそのご紹介をしましょう。

※このコーナーでは読者の皆様からの看護、介護に関する疑問・質問に、看護大学の教員がお答えします。ご質問事項がありましたら、上越ニックサービスまで、はがきかファクスでお寄せください。